

今年度の「HELLO NEWSPAPER」コースのテーマは、「東日本大震災について考える」であった。大災害とメディアの役割について考え、京都の私たちに何が出来るかを「自分事」としてとらえることを目的に、さまざまな活動や体験をしてきた。この新聞では、私たちが行ってきた活動について紹介する。

本校は、「京都教育大学教育研究改革・改善プロジェクト」の指定および助成を受けている。そのため、一般紙五紙朝日・読売・毎日・産経・京都と英字紙のデイリーヨミウリを無料提供していただいている。これらの新聞は、生徒の皆さんにも手軽に読んでいただけるよう、職員室前に掲示されている。

私たちはこれらの新聞の内容を生徒の皆さんに知っていただくために、毎日お昼休みに放送で新聞の記事紹介を行った。これにより、私たちが記事の内容を把握し、グループ研究などにも役立てることができた。

朝日新聞 京都工場見学

九月七日に、朝日新聞京都印刷工場へ見学に行った。新聞がどんな工程で作られ、どのようにして家庭へ届けられるのか、また、新聞社ではどんな仕事をしているのかということを知ることができた。

はじめに私たちが見学したのは、印刷用の巻取紙の倉庫である立体紙庫や巻取紙の自動仕立て装置、搬送台車ロボットAGVなどだ。それから、実際に新聞を印刷する回転機、新聞を挟んで運んでいく新聞搬送キャリアなども見学した。

また、担当者の方が私たちからの質問にたくさん答えてくださった。それらの中からいくつか紹介する。

Q この仕事をやっていてよかったことはどんなことですか？

A 印刷工場の仕事は決められた時間にお届けすることが使命なので、それが達成できた時が喜びとなります。

Q 一日二回も、どうやってあんなに長い量の仕事を考えるのですか？

A 朝日新聞社には約二千五百人いる記者や、国外の通信社などから毎日たくさんの記事が集まります。その量は二百五十ページの文庫本約八冊分に相当します。その短くすることはあっても足りないということはありません。



グループ研究

グループ研究では、グループごとにテーマを決めて学習を進めた。各グループの設定したテーマは、

- ① 東日本大震災発生から十一月までの報道（二面）の重点の変化
- ② 原発事故報道の月ごとの移り変わり
- ③ 東北地方の地方紙（河北新報、福島民報）と全国紙の報道の違い
- ④ 全国紙二紙（朝日新聞、読売新聞）の報道の違い

どのグループも、記事の分析や比較をし、パワーポイントを用いてわかりやすく発表することができた。また、研究の結果から自分たちなりの考えを持つこともでき、とても有意義な学習となった。

新聞記者の講演

一〇月一九日のMETの時間に、朝日新聞社大阪本社より社会部記者の宮崎園子さんに来ていただき、お話をうかがった。テーマは「東日本大震災取材して『阪神』の取材経験をふまえて」だった。宮崎記者は阪神淡路大震災、東日本大震災、昨年の台風一二号の被災地取材されてきた。その経験をもとに宮崎記者自身が学んだことを、ご自身が書かれた記事を例に挙げながら説明してくださった。

例えば、「数字を一人歩きさせない」ということだ。震災の犠牲者数がどんどん増えていることは数字を見るだけでわかる。しかし、避難先、避難中の「死」という被災地の実態は数字だけ見てもわからない。そのことを震災の取材を通じて学ばれたそうだ。実際に取材しなければわからない、現場の実態を正しく伝えていくのが新聞記者の務めであると宮崎記者はおっしゃった。また、講演後には生徒の代表者からの質問にも答えてくださり、学びを深めることができた。

【9月7日
朝日新聞京都工場
熱心に耳を傾ける】

大学生とのコラボレーション

この活動は、京都教育大学の学生と本校の中学生が四、五人のグループで話し合いを行い、それぞれ発表することで、新聞への理解を深めることを目的として行われた。

第一回 「喜怒哀楽」について話し合おう！

第一回の授業（十月十二日）では、新聞を読んで、「喜怒哀楽」を表している記事について話し合った。新聞記事に表れている「感情」を読み取ることに、例えば東日本大震災について、その新聞社がどのような考えを持っているのかなどを考えることができた。

第二回 「東日本大震災について考える」

第二回の授業（十一月二日・十九日）では、私たち中学生が東日本大震災を通して考えなければならぬことを大学生と協同的に検討し、具体的にプランを立てながら、最終的に全校生徒に提案したり、実際に行動を起こすことを目指して行われた。

ここで各グループが設定したテーマの一例を紹介する。「被災者と非被災者の心の一致」をテーマとしたグループは、被災者の気持ちを考えない発言や行動をする非被災者について述べた新聞記事を取り上げ、被災者の願いと非被災者の行動のずれが発生しているところを問題の所在としてとらえた。そして、問題解決の方法として、「被災者の立場に立つて発言、行動する」「被災者の状況を知るために新聞などのメディアを活用する」ということを提案した。

この授業を通して、中学生である私たちにもできることがあり、また、できることを考えていかなければならないことが分かった。

このコースでの学び

文部科学省が示している総合学習の目的、

- ① 自ら学び、「自ら考える」力を身につける。
- ② 「学び方」や「調べ方」を身につける。
- ③ 自ら課題を設けて、「将来の生き方」を考える。

をもとにMET学習は行われている。

HELLO NEWSPAPERコースでは、特に自ら調べ、学びを深める力『リサーチ・アビリティ』、グループで互いに学びあう力『コラボレーション・アビリティ』、自分の意見を整理して、相手に分かりやすく伝える『プレゼンテーション・アビリティ』を重視しながら、新聞を読み、時代を読み解く力『メディア・リテラシー』を培うことを目標としてきた。

今年二〇一一年には、東日本大震災が起こった。未曾有の大災害と呼ばれ、福島第一原発事故については様々な情報が行きかった。リサーチしなくても自然と情報は入ってくる状態。しかし、そのことを学ぼうとすると、どの情報が必要なのか、本当に正しい情報なのか分からなかった。東日本大震災が起こった今年であったからこそ『メディア・リテラシー』の難しさ、大切さを知った。新聞を読み、私たちが読み解いた時代は情報で満ち溢れている。そして、その情報には、真偽が問われることもある。そんな時代に情報が遅れて現れることもある。また、情報が隠ぺいされることもある。

このようにHELLO NEWSPAPERコースでは、右記のような取り組みで今の時代を見つめなおしてきた。それによる考えは個人個人で違う。それでも、間違いなく『未来を拓く』一歩となった学びであったと思う。

【協力者】

- 京都教育大学社会科学科 学生の皆さん
- 京都教育大学 平石隆 敏先生
- 朝日新聞社京都印刷工場の皆さん
- 朝日新聞大阪本社 宮崎 園子記者
- 本校 神崎 友子先生

【作成者】

- 京都教育大学付属桃山中学校
- 平成二十三年度MET
- HELLO NEWSPAPERコース
- 二年 清水 結衣・畑 菜々美・林 実希



【大学生との会話がはずむ】

